

## 桑名日記、柏崎日記にみられる

### 近世庶民の家庭教育について



松川 由紀子

#### はじめに

幼稚園、保育所などの幼児教育・保育機関のなかった江戸時代においては、主に家庭が幼児の教育の場であったといえるだろう。当時の家庭教育のあり方については、幾人かの教育思想家たちによって語られている。たとえば、中江藤樹（一六〇六―一四八）の『鑑草』（かかんそう）（卷之四・教子報、一六四〇年頃）および大原幽学（一七九七―一八五八）の『微笑幽玄考』（けいごう）（子育編、一八五八年）などにおいては、幼児の自然の発達にまかせるといふような教育方法が述べられている<sup>②</sup>。また、貝原益軒（一六三〇―一七一四）の『和俗童子訓』（わよくどうじくん）（二七一〇年）においては、幼ない頃からきびしくしつけ、教育しなければならないことが強調されている<sup>③</sup>。

このように、江戸時代の家庭教育をめぐる論は、子どもの自然の発達にまかせせる教育ときびしい教育との両極に分れているようである。しかし、こうした論は、あれかこれかというような二者択一的なもので、これのみではそれほど意味のあるものとは思われない。また、こうした教育論によってだけでは、子どもたちの具体的な生活、家庭教育の様子は伝わってこない。そこで、家庭教育の実践記録を読むことによって、いくらかでもおぎなうたいと思う。

ここでは、名もなき庶民の日記をとりあげてみよう。それは、江戸時代末期に生きた下級武士が日常の出来事を気どらぬ文体（口語体）で綴った「桑名日記・柏崎日記」である<sup>④</sup>。

「桑名日記」は、桑名城下で米蔵の出納役をしていた渡辺平太夫（十石三人扶持）が記したものである。そこには、孫の鎌之助（一八

三五年十二月八日生)の成長ぶりを記した箇所がかなりみられる。そして、「柏崎日記」は、平太夫の長男であり、鐮之助の父親である渡辺勝之助(松平藩の越後支領・柏崎陣屋詰の勘定人、

九石三人扶持)が記したものだ。そこには、長女お祿(一八三九年三月十九日生)、次男真吾(一八四二年四月十一日生)の日常生活の描写が沢山みられる。このように、両日記は、育児日記の側面が強く、また、伊勢と越後に遠く離れているが、数か月ごとに相互に交換されていたので、一体をなすものと考えられる。なお、両日記とも、一八三九年(平太夫・五十五歳、勝之助・三十七歳)から(平太夫の亡くなる)一八四八年までの十年間に渡って記されている。それは、ちょうど、鐮之助とお祿の幼児・児童期、真吾の幼児期にあたっている。

では、この三人の子どもたちの幼児期の生活の様子を見て、家庭教育の実際について若干考察してみよう。

### 一 桑名日記にみられる鐮之助の幼児期

鐮之助(愛称、鐮こ)は、父母が柏崎に転動したため、祖父父母のもとで育てられている。祖父の平太夫のかわいがりようは大変なものである。鐮之助は、裏の金毘羅へ太鼓をたたきにいったり、近くの川へ水遊びにいったり、近所の子どもたち、若者たち

とすもうとり遊びをしたり、おじ、おばたちと一緒に町に見世物を見にいったりして、大勢の大人・子どもたちのなかで生活している。

では、祖父の手による鐮之助の生活を見てみよう。

一八三九年九月五日(満三歳)

下いんじよのかめへ、ひとりでしっこをして、じょぼじょぼ音のするを面白がり、よくひとりでかめの中へする。けふも道がわるいに、かめへしっこをしにゆくとて、下駄ばきにて出て膝をつき、着物をよごしたさかい、洗濯綿入のたもとのあるのを着せたところが、誠にうれしがり手まりを入るやら、網を入るやら、御ぜんをたべるにも膝がよれるとて手拭をかけ、右のたもとを見左のたもとを見、にこにこ笑ひながら御ぜんを食べる。……人おくめせぬ故、誰にもかわゆがられる幸な小坊主なり。あまり自慢するやうなれど、ほんにほんに愛嬌者。

鐮之助の動作の一つ一つがかわいいので、祖父もにこにこ。鐮こは、いつも祖父と一緒に寝起きし、祖父の洗顔をまねたり、栗の皮をむいてくれるようにねだったりしている。あたたかい家

庭・近隣のなかでまわりからかわいがられながら育てているのであるが、鎌こは次第にわんぱくになっていく。

同年十月十三日

いやもふ鎌この日ましにわるさをして、いふことをきかぬには、おぼもころっとする。くれあいにもおぼもが流しもとをしもふているのに、ちちをもふといふてぶらさがり、ちとまでといふてもきかず、おぼもが云には、このやうにこれをいぢるところを、ととやかかか一目見せたいわと云てくどく。それからせんとふへいっただころが、手ぬぐいをわすれてきたから、とつてこへといふて大だもおこし、しかたがなへからおこん（おぼ）にいそひでとりにやる。それからよふやくきげんをなおしてかへる。

同年十一月二十四日

鎌こそのお触れ（お知らせ）をしつかりにぎって、どのやうにだましても叱つてもはなさず、しわだらけにするゆへ、むりにとりあげたところが、大だだおこし、お婆とおなか（おぼ）とかかかって、腹へきうすゑにかかったけれど、なかなか力があつて、よふよふ一つすゑておきにしたげな。それでもきかんで、お触れをよこせとだだをこねたげな。いやも

うこのあいだは、氣にいらぬ事じゃと、おぼも馬鹿やろおぢいさばかやろ、だれのことでも馬鹿やろ、おぼなどはぼろを持ってくらしつける。すみからすみまでわるさをするには、おぼもこまりはてる。

三歳の反抗期。大人たちは鎌この行動に手をやく。

一八四〇年一月二十六日（四歳）

鎌こ大分べろがたっしやになり、ばべるもたべると言ふうになり、指四本出して、これいくつといふ故、四つといへば又五本出していくつといふ。五つと言へば引っこませて、げらげら笑ひながら、べろりと言ふて江戸豆をこしらへてちよいと出すを、あゝきたな、きたなといふを面白がり、又初の手の通り指を出して、しまひには豆を出す。

ここでは、指を四本出したながら、つまり、実際の量に対して、数字の四を教えており、量と無関係に数を教えているのではない。また、これは遊びのなかでなされている。この算数教育のやり方は今日にも生きるだろう。

同年五月十一日

子供といふものは、おかしなものにて、よその子供がござうりもはいて見ているを見て、はきたくなり、せったも皮ぞうりもいくらもあるに、たつた今ごんぞうりを買うてくれといふて、お婆にねだりしゆへ、貰ふてやったら、大そううれしがり、毎日そのごんぞうりが多くといふて、はいて歩きあそぶ。

子どもが大人とは違ったものの考え方をすることに祖父は気づき、子どもの要求を受けられている。

一八四一年四月二十三日（五歳）

鎌こ、おめこ、おかんこ、へのこ、ちんぼが口についてるには困る。灸をすえてやるぞとおどかすと、ごめんごめんとあやまる。その後から大口をきく。

同年九月七日

鎌おじいさ寝なんかといふゆへ、小便して寝る。おじいさむかし語ろうか。アノネ松の木に猿がのぼっていたそうだと人を見つけてのぼっていったら、猿がちよこちよこ逃げて行ったそうだと。それでいちがさかへた（おしまい）。サアこんど

はおじいさの番だ。裏へ狐が来ていたそうだと。鎌が二階へ上って見ていたそうだと。雨が大降りになってきたそうだと。それでどこかへ行ってしまったそうだと。それでいちがさかへた。そうでなへそうでなへ。おじいさのは、うそだ。裏へ狐がきていたそうだと。おんさが佐藤へ武さ啓さを迎へにいきなざったさうだ。そしたら金山の金司さんが飛んできなつたそうだと。二階から見えていなつたら、墓所から本尊さんの方へきたそうだと。雨が大降りになってきたら又墓所の所へきて、身体をぶるぶるさせて、石塔の上をひょいひょい飛んで、そして郡の方の垣の中へ入ってしまったそうだと。それでおしまい、いちがさかへた。おじいさ、もうねぶろうかとすっこむ。間もなく眠る。

祖父が寝床でよくむかし話をきかせているためか、このように、わんぱく坊主がお話をする場面がみられる。鎌こは、大人がイヤがる言葉をわざと使ったりするが、正しい言語を身につけていっているようだ。

こうして、鎌之助は幼児期を終え、以後、次第に学習の生活へとはいって行く。その場合、まず遊びのなかで、祖父から草双子(5)、五十三次(6)、百人一首(7)、大学(8)などを教えてもらったり、

(寢床で) 九九を教えてもらったりして、家庭で学習準備がなされた後に、七歳になって近所に手習に行っている。学習準備といっても、大人がイヤがる子どもにも教えているのではない。それは、子どもにも学習要求がめばえ、大人に教えてくれるようにと求める態度が身についていることを意味する。また、学習の生活といっても、ただ書物を読み、習字をするだけではなく、友人とよく遊んでいる様子が描写されている。そうしたなかで、社会性をも身につけていくのである。

鎌之助は、その幼児期を思う存分に生活していた。祖父はじめまわりの者から大切に見守られながら成長していった。そして、彼からだされた要求はほとんど受けいれられ、むやみに禁じられていないようだった。また、当時、支配層の間でいやしいものとされた数字についても、それが生活に必要な(役立つ)点から、教えられていた。私たちは、武士の子といえども時代のワクにとられていないことと遊びの生活が大切にされていたことに注目しておきたい。

## 二 柏崎日記にみられるお祿の幼児期

お祿については、誕生からずっと日記に綴られている。夜泣のまじない、食いはじめ、歩きはじめなどの記述がみられる。ま

た、一歳ごろの(しらみを取る真似などの)一つ一つの動作に大人たちがほほえみ、まわりの世界に笑いをまきちらしている様子もみられる。そして、次第にお祿の行動は活発になって、大人たちをとまどわせていくようだ。

一八四〇年八月七日(一歳)

おろく悪ひことするは、なかなか一通の事にはなし、少し油断すると水瓶の水は汲み出し、板の間中水だらけ、湯殿へ行水鉢の水あたまたまからあびるやら、はだして庭へ降りるやら、くどの灰はつかみ出す。灰吹は畳へこぼすやら、か様な女の子もあるものかとあきれ申候。しかし薬三まいするよりましかと申居候。

同年九月六日

おろく水がめの中に真つ逆さに落ち、足の先斗に見ゆる、お菊(勝之助の妻) うろたへて上る、水も不呑何の事もなし。

このようなお祿の日常は、武士の子であることを忘れさせる。それは、身分にかかわりなく、いついかなる日本人にも共通にみられたことのように思われる。

お祿は、鎌之助にくらべ、言語面の発達が早いようである。そして、越後の町角で一日中（守りとともに）遊ぶので、方言を身につけていく。

同年十月二十八日

お六このごろは大分口が廻り、ちゃちゃ、かゝ、おはゝ、しょんべ、うんこ、まめ、とゝ、その外いろいろ片ことは出来申候。

一八四一年三月九日（二歳）

お六達者になり、お菊の草履下駄まで引かけ、ばたりばかり出かけ申候。次第に越後言葉能覚ひ、大笑ひのこと度々御座候。イツチよく申ことはモダアといふこと也。おろくこれは誰んだと申セバ、おれんダモダア、又アチスエンカといふとイヤダモダア、何でも後へモダア付るを面白がり、みんながかりあふ。毎日守りと町へ行遊んでまいる故、おのづと越後者になり申候。

そして、反抗期をむかえる。

一八四二年十二月二日（三歳）

（早朝）お六お向へ行ふと申、未だ雪明け来らず行れぬと申ても聞ずに出る。おきくいろいろにだましてもきかず、雪の中へほり出してくれと申、お六だいて入口塀の外雪の中へ仰のけに投げってくる。余り玉げ候や早速泣き出さず、夫より泣声聞ゆるけれどかまわんで戸をしめてしらぬふりをして居る。その内部屋の与七雪明けに来て、これも玉げ起してやる。その音でお向の叔母さ飛で出、内へつれてゆきなざる。お向でまだ火燵出来ずつめたへから行でないと申ても聞ず、お菊近頃真吾抱きづめお六つきどころなくお向へ斗行たがり候も尤也。されどもどういふことか、お菊お向へやること甚嫌ひ也。お向の衆はろく随分可愛がり被下候。

一八四三年五月二十九日（四歳）

お六この頃は別してめろめろと泣き出し、今日昼過品川の見へ候時、私の側に立はだかり居候間、すわり時宜をしやれと申せば泣出し御向へ馳け行。大だだ起し候に付、品川被掃候に付直にお向へおきくも私も参り、叔母さと三人がかりにて、ちりけへ灸を十一すえてやり、それよりおとなしくなり泣きくたぶれ昼寝いたし候。

その後、お祿は弟真吾の守りをするようになる。そして、数え

七歳の正月には子ども仲間の寄合によばれて行ったり、手習をはじめたりしている。しかし、真吾の守りに手がかかり、なかなか学習はかどっていないようだ（その年の暮までによくやくいはと一二三を仕上げている）。さらにその後も、末の弟行三郎（一八四七年一月十九日生）の守りに手間がかかり、学習のほうは思うようにやれていない。母親が越後に引越してから、経済的貧困生活のなかで病弱になったために、また、守りをやとうゆとりもないために、弟たちの守りがお禄の肩にかかっている。そして、加えて、きのこ採り、走りづかいなどにもお禄の働きが期待されていた。とはいえ、お禄自身の遊びの生活（子ども仲間との遊び）は大人たちによって大切に見守られていた。

### 三 柏崎日記にみられる真吾の幼児期

真吾は病弱な母親から生まれたためか、はじめは健康にすぐれず、発達も遅れがちであった。その頃の日記には、もらい乳、民間療法の様子が多く記されている。しかし、数え三歳の正月頃までには健康をとりもどし、家庭の中に笑いをふりまく存在になっていた。

一八四五年一月十四日（二歳）

真吾申にはボチャにも髪イッテくんと申に付、芥子大分延び候間、少しづつつまみ、両方より合せて小さなまげに結ぶてやり候。蝶々のとまり居候形にて、なかなか面白し、大悦也。大ひやうげもの、内にさへ居れば私共を色々のことを片言交りに申、顔付をいろいろにして見せ、笑はせ居り申候。

こうして、健康をとりもどした真吾はよく遊ぶ子どもになった。お禄と遊んだり、父親の勤める役所に泊りに行ったり、その仕事を見物に行ったりしている。

一八四六年四月七日（三歳）

真吾申にはオトツサア役所へ行なる、おれはどろほふの吟味に行と申、おれも行て見てイムカへと申、姉さと見にきやれと申て出る。直に後より真吾、お六と来る。当所吟味所は御座敷の脇に有之、御座敷より障子に穴をあけ、大勢のぞき見る事也。無程吟味初める。真吾障子の穴より見て居候。大声にて盗賊を呵り候へば、真吾何かお六と申合ふ音聞る也。相済と外の覗人と一同に逃て帰る。帰宅致候処、真吾申には、どろほふはオトツサに叱られたけれども、笑てゐたぜと申て、一向恐しがらぬ也。

その頃から、真吾はまわりの大人たちに、なぜ、どうして、という質問を連発しはじめる。(どうしたわけか、このような質問は、お祿の場合にはほとんどみられなかった)

同年八月六日(四歳)

暮合に真吾申には、余所の人は皆釣りに行きなされるけれど、オツトサはなぜ行きならんだらうと申、大笑也。此頃は色々不審尋ねる也。今日は御節句だに、なぜ雨が降るだらふ。花は木にどぶしてなるのだらふ、おとつさはどうしておつかないのだらふ、などゝ申て妙な事申て笑せ居候。

同年九月二十日

折々ヒョウゲ口利、笑わせ申候。此頃もおかつき、チンボコの隣はキン玉、キン玉の隣は尻の穴だねへ、どうして尻に穴が有だらふ杯と申大笑仕り候。右に類し候事折々申出候也。

同年十二月二十八日

真吾近頃は何でも不審に相成、様々の事を尋ね候。昨夜も寝て居り、海の鳴音を聞付て申には、海は誰か掘て水を入れたんだへ、本から有るのさ、ソフカヘソレデモ誰か掘んけりや深ふならん、町の者でも鍬で掘たるふか杯と申す。又申す

には、手のひらは誰が付てくれたんだへ、本から付てあるのさ、フム……右の様な事毎日くドク聞申候。

一八四七年八月七日(五歳)

(地震がおこった時) おきくと真吾座敷に居り庭へ飛び出し候よし。真吾未だ地震と申は訊わからず、何か形のあるものと心得居り候哉、地震と申せば、外へ出て見る。おや地震は何処へ行て仕廻ふたるふ、地震が見たくてならんと申候由。

それとともに、にくまれ口をきいたり、だだをこねたりするようになる。

一八四六年九月二十日(四歳)

真吾此頃は誠に大丈夫、大食到終日能遊び、喰物ねだり致し候事絶て無之。只悪たれ口は大分出し、昨夜些小便シビリ、今朝おきくに呵られ候処、ソシナラモットたれてやるぞと申し、誠に平気なもの也。女子と違ひ、めつたに泣事無之。泣ても長泣はせず。

一八四七年十二月三十一日(五歳)

おきく行三郎抱て、足元不見、真吾の持遊箱の蓋を踏み破



り、真吾大おこり、只今元の通り拵ふてくれと申て、だだ起す。色々だましてもすかしても不聞、おきくに頭一つ叩かれ泣き出し、年も取らん、べいも着んでゑゝ杯とぢくね出し、御隣より聞付、運公晩に元の通り拵ふてやるとだまされ、漸きげん直し。

その年の冬より翌年の正月以降、真吾は父親から唐詩選五言絶句、大学の空読を教えてもらい、また手習いをはじめている。それも真吾の要求からはじめられたことだった。そんな真吾の様子にお禄が刺激を受けて学習する気になり、家の中は二人の子どもの習いごとで活気づく。そして、子どもたちの祖父平太夫が他界したその頃、日記は終わっている。

### おわりに

以上が、桑名日記・柏崎日記にみられる三人の子どもの幼児期の描写である。このなかで、武士の子らしい生活は、真吾の数え三歳の正月（厳密に言えば、年末の十二月三十日）に、特別注文の脇差を父親から与えられて喜ぶ箇所のみみられるくらいである。それ以外では、つまり、日記のほぼ全体において、武士の子であ

ることを忘れさせ、いついかなる日本人にも共通している子ども  
の生活のように思われる。また、特に柏崎日記においては、衣食  
にすら不便している貧乏生活の様子がありありとみられ、この点  
も日本人の常民性として読みとれるようである。

この兩日記を通して、近世庶民の家庭教育の様子の一端を見る  
ことができた。幼児の要求を受けとめ、あるいは、灸をすえてで  
も悪いことはイケないものと納得させ、遊びの生活のなかで次第  
に児童期の学習の生活へと導き、また、一貫して地域社会のなか  
の子どもとして遊びの生活を大切に見守るなど、幼児教育、家庭  
教育の基本をしっかりとふまえていることがわかる。これが名も  
なき庶民の家庭教育の実践記録であることは、教育思想家の文献  
をつらねた従来の幼児教育史研究にとっても、また、今日の家庭  
教育のあり方を考える上においても、大きな意味をもつと思われ  
る。

註(1) なお、日本保育学会著『日本幼児保育史・第一卷』（一九  
六八）に「江戸時代にあったと思われる保育施設（江戸中  
期）」という稿がみられるので、参照されたい。

註(2) 藤樹は、「童部わざ、だはぶれごとなどをば、その子の心

にまかせてあなたがちにしましめ制すべからず。いかんとなればこれらのわざは年たけぬればをのづからなるものなり」

〔藤樹先生全集〕第三冊、四〇七頁〕と述べている。また國学は、「松の枝ぶりよからぬとて、漸々の事出でたるばかりの枝を切る時は、その木は痛み屈して舒び難かるべし。人の子も亦是れに似たる味ひあり。其の所以は、才智初めて顯はれ、漸々に言ひ為すの宜しからねばとて、いたく是れを制するときは、其の制せらるゝ困しみに、思ふ事も唯々捻塊れるばかりにて、才智屈して舒ぶる所以なし」〔大原幽学集〕三八二—三頁〕と述べている。

註(3) 益軒は、「小児の時より早く父母兄長につかへ、賓客に対して礼をつとめ、読書・手習・芸能をつとめまなびて、あしき方にうつるべきいとまなく、苦勞さすべし」〔養生訓・和俗童子訓〕二二二頁〕と述べている。

註(4) この小稿では、『日本庶民生活史料集成・第一五卷、都市風俗』(一九七二)より「桑名日記・柏崎日記(抄)」を資料として用いている。なお、原本は三重県有形文化財(民俗資料)に指定されている。

註(5) 草双紙のこと。江戸時代中期以降あらわれた、平かな書きの絵入り通俗娯楽読物。手軽く読め誰にもこよなく愛されて

いた。菱川師宣らの風俗画が文字の領域を圧迫している。婦女子、子供向き。浮世絵の大量生産方法である版画は、文字及び出版の大衆性と結合し、新に絵入本となって庶民大衆の間で栄えた。(久松潜一編『日本文学史・近世』、小池藤五郎執筆)

註(6) 安藤広重の木版画「東海道五十三次」のこと。

註(7) 上代から鎌倉時代初期までの歌人百人の短歌を一首ずつ集めたもの。江戸時代以降、一般大衆層にも和歌のよみ方や一般教養を授けるテキストに使用され、往来物、手習の手本に採用され、婦女子の遊びの「歌がるた」として庶民層に普及していた。(『世界大百科事典』、小高敏郎執筆)

註(8) 儒教の經典。四書の一つで、もと「礼記」の一編。朱子は(経については)明明徳・新民(旧本では親民)・止至善を『大学』の三綱領とし、格物・致知・誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下を八条目として注釈した。大学とは、「大人の学」を意味し、為政者の心を正すことが政治の根本である、ということ説いた書である。日本でも鎌倉時代以後、心性の書として尊崇された。(『大日本百科事典』、安居香山執筆)

(山口女子大学)